

令和6年度 兵庫県立阪神特別支援学校 学校評価

重点目標

I つながる連携

- I-① 一人一人の多様な教育的ニーズに応じた教育の充実
- I-② 自立と社会参加を見据えたキャリア教育及び進路指導の充実
- I-③ 訪問教育の充実
- I-④ 発達段階に応じた人権教育の推進
- I-⑤ 生徒指導(生活指導)体制の構築
- I-⑥ 教職員の専門性及び授業力の向上

II つながる連携

- II-⑦ 信頼される学校づくり・地域とともに歩む学校づくりの推進
- II-⑧ 交流及び共同学習の推進
- II-⑨ 分教室の教育内容の充実
- II-⑩ 特別支援教育のセンター的機能の充実

※評価について、A:達成している B:やや達成できた C:あまり達成できていない D:達成していない

学部 分掌	学部・分掌目標	具体的方策	評価指標	達成状況	項目 評価	評価	課題と改善方策	
小学部	自立と社会参加に向けて、児童一人一人の実態や学習・生活上の課題から目標を設定し、指導や支援の充実を図る。 重点目標 ①②④⑥⑦	(1) 保護者や教員間で連携して児童の実態を十分に把握し、学習や生活上の課題を明らかにしたうえで、自立と社会参加に繋がる目標を設定する。 (2) 支援の手立てや教材教具を工夫し、児童が自分で選択したり考えたりして取り組む場面や言葉やサインなどで自分の思いを伝える場面を設定する。 (3) 教員間で児童に関する情報を共有し、PDCAサイクルで定期的な見直しを行い、関係機関との連携や学校内外の専門性のある人材活用も視野に入れながら、日々の指導や支援の充実を図る。	(1) 児童の実態を把握し、自立と社会参加に繋がる目標を設定できたか。 (2) 児童が主体的に考えて行動したり、自分の考えや思いを伝えたりすることができる取り組みができたか。 (3) クラス会、学年会、学部会などで児童に関する情報共有を行い、各場面の具体的な配慮や手立ての設定一実践一見直し一改善を行うことで指導や支援の充実を図ることができたか。また、必要に応じて、関係機関と連携したり、学校内外の専門性のある人材を活用したりすることができたか。	(1) 引継ぎ資料や日々の生活から児童の実態を把握し、保護者と相談して自立に繋がる目標を設定できた。事業所説明会への参加等を通して高等部卒業後の生活や進路先での活動内容について知ることができ、将来の社会参加を見据えた目標設定を意識するようになってきている。	4.5		(1) 引き続き、将来の社会参加を見据えた目標設定ができるように、事業所説明会・進路研修会(企業・福祉事業所見学)への参加や中学部高等部との連携を通して、小学部教員の視野を広げていく。 (2) 児童が選択したり、伝えたりする場面の数を増やすだけでなく、その取り組みが「主体的」になっているかを考える必要がある。学部会、学年会、クラス会で話し合い、児童一人一人に合った「主体的」な取り組みとは何かを考える。 (3) 引き続き、関係機関との連携や学校内外の専門性のある人材の活用を視野に入れ、保護者とともに、児童への指導支援の充実を図り、児童を支える関係機関とのつながりを強化していく。	
				(1) 児童の実態を把握し、自立と社会参加に繋がる目標を設定できたか。	(2) 児童の特性や学習進度、興味・関心に応じて、指導方法・教材等を工夫し、一人一人に合った学習活動や学習課題に取り組む機会を設定することで、児童が選択したり、伝えたりする場面を増やすことができた。			4.6
				(1) 自立活動6区分に整理した児童の実態を基に、発達段階をふまえた課題を設定できたか。	(3) 教員間で児童に関する情報を共有し、PDCAサイクルで定期的な見直しを行い、関係機関との連携や学校内外の専門性のある人材活用も視野に入れながら、日々の指導や支援の充実を図ることができた。			4.5
中学部	生徒の発達段階と障害特性をふまえた指導内容と単元計画の充実を図る。 重点目標 ①②⑥⑦	(1) 自立活動6区分に整理した生徒の実態を基に、発達段階をふまえた課題を設定する。 (2) 3観点の学習評価、生徒の障害特性を総合的に考慮し単元計画を立てる。 (3) 個々に応じたコミュニケーション手段(絵カード、ICT機器等)や活用場面を検討し、効果的な計画を立てる。	(1) 自立活動6区分に整理した生徒の実態を基に、発達段階をふまえた課題を設定できたか。 (2) 3観点の学習評価、生徒の障害特性を総合的に考慮し単元計画を立てることができたか。 (3)-1 個々に応じたコミュニケーション手段(絵カード、ICT機器等)や活用場面を検討し、効果的な計画を立てることができたか。 (3)-2 教師間での情報交換、共有、自主研修等を通して、生徒への指導や支援に反映できたか。	(1) 課題設定の際、自立活動6区分に整理した情報を基に適切な課題を設定することができた。	4.5		(1) 今後も、根拠のある指導、系統立てた課題設定ができるよう引き続き取り組んでいく。生徒が今抱えている困り感に焦点を当て、卒業後を見据えた「生きる力」の基盤を育てていく。 (2) 生徒の発達段階、障害特性等を踏まえた単元計画を今後も進めていく。また、3観点を基にした単元内容の吟味、環境設定に加え、子どものやる気を促進するような関わり方など、より良い学びに繋がるような工夫を検討していく。 (3)-1 生徒のコミュニケーション手段の獲得に向け、今後も継続して計画を立てていく。ICT機器を手段としての活用だけでなく、自らの発声発語を促すためのツールとして活用するなど、コミュニケーションの幅を拡張していくような使用方法も検討していきたい。 (3)-2 引き続き支援部や各機関と連携を図り、生徒の支援に繋げていく。また、家庭との情報共有については、丁寧に慎重に行い信頼関係の構築に繋げていきたい。	
				(1) 自立活動6区分に整理した生徒の実態を基に、発達段階をふまえた課題を設定できたか。	(2) 3観点の学習評価、生徒の実態に応じた単元計画を立てることができた。			4.5
				(1) 自立活動6区分に整理した生徒の実態を基に、発達段階をふまえた課題を設定できたか。	(3)-1 生徒の障害特性に応じて、必要な支援ツールを用意し活用できた。また、取り組みのなかで、生徒自ら発声コミュニケーションを取ろうする場面も出てきており、支援ツールの効果を実感することができた。			4.6
高等部	生徒の現在や将来の生活がより豊かなものになるよう、保護者および関係機関と連携を図り、指導や支援の充実を図る。 重点目標 ①②④⑤⑦	(1)-1 生徒各々が、卒業後にそれぞれの実態に応じた主体性をもって社会生活を送るために必要な力を身につける学習を展開する。 (1)-2 生徒本人と保護者が高等部卒業後の生活をイメージした上での進路選択が行えるよう、必要な情報を提供するなど、進路指導部・担任・保護者間での連携を深める。 (2) 福祉、医療、放課後等デイサービス事業所などの関係機関と連携し、系統だった指導や支援の充実を図る。	(1)-1 自己選択自己決定の機会を設定するなど、生徒の実態に添った主体性の向上を図る取り組みが行えている。また、主体性を発揮するに至る経験を積み重ねるために、外部人材やICTを活用した体験等を実施できたか。 (1)-2 進路説明会、実習説明会、進路個別懇談、定例の懇談会や日々の連絡などを通して情報提供し、生徒の実態に応じた将来像について本人・保護者の理解を深め卒業後の生活への見通しを共有することができたか。 (2) 生徒の関係機関と必要に応じたケース会議・相談等を通して、保護者・関係機関・学校の三者間で情報を共有し、指導や支援に活かすことができたか。	(1)-1 継続的に実施してきた消費者教育・職業ガイダンス等の外部人材の出前講座に加え、今年度より外部専門家活用事業を活かし、さきり織りの講師を招き、主体性を発揮するに至る経験を得るための活動の充実化を図ることができた。	4.5		(1)-1 消費者教育等の出前講座は維持しつつ、外部専門家活用事業のさらなる活用を促進したい。また公共の場で求められるコミュニケーション力の向上をねらいとした取り組みの機会を、校外学習を軸として設定していく。自立活動、職業等の授業で取り組んでいる実態に応じたコミュニケーション力向上の取り組みも継続する。 (1)-2 生徒・保護者への情報提供等の取り組みは、卒業後の生活への見通しにつながるよう、進路指導部との連携をより密にして積極的に取り組んでいく。教員についても、卒業後の生活についての知識をより深め、入学時から卒業後の生活を見据えた系統的な指導支援を、スムーズな連携のもと行えるよう取り組みたい。 (2) 今後も連携会議やケース会議等をニーズに応じて積極的に実施していく。支援部との連携を引き続き密にし、事例検討会等を通じた情報共有をもとにして、効果的な指導支援につなげたい。	
				(1)-1 自己選択自己決定の機会を設定するなど、生徒の実態に添った主体性の向上を図る取り組みが行えている。また、主体性を発揮するに至る経験を積み重ねるために、外部人材やICTを活用した体験等を実施できたか。	(1)-2 進路説明会、実習説明会、進路個別懇談、定例の懇談会や日々の連絡などを通して情報提供し、生徒の実態に応じた将来像について本人・保護者の理解を深め卒業後の生活への見通しを共有することができたか。			4.5
				(1) 自立活動6区分に整理した生徒の実態を基に、発達段階をふまえた課題を設定できたか。	(2) 必要に応じてケース会議等を実施し、医療・福祉等の関係機関、および保護者との連携を通して、指導・支援に活かすことができた。			4.4
分教室	高等学校等との交流及び共同学習や地域との連携を深め、生徒一人一人の社会自立と職業自立に向けた指導の充実を図る。 重点目標 ①②⑦⑧⑨	(1) 生徒の社会性を養うとともに、様々な人々と協力し合って生きていく力の育成を目指し、武庫荘総合高等学校との交流および共同学習について、幅の広がりや内容の深まりを図る。 (2) 生徒の卒業後の社会生活及び職業生活に焦点を当て、生徒の地域活動の場の広がりや活動の充実を目指し、地域の方々や諸機関との継続的、組織的な連携及び協働の取り組みを推進する。	(1) 武庫荘総合高校との交流及び共同学習について、前年度までの取り組み内容を深め、新しい取り組みにより幅を広げることを目指し、担当者間での連携を密にし、充実した交流授業及び行事の展開に繋げることができたか。 (2) 授業や行事、地域貢献活動について、地域との連携及び協働の取り組みを充実させ、新たな取り組みや活動の場の設定、実施回数増加に繋げることができたか。	(1) 総合的な探究の時間において、昨年度より開始した1学年同士の交流授業を継続するとともに、2学年同士の交流授業を開始した。2学年の交流では、分教室の授業に数名の高校生が参加する形態を取り、地域イベントへの共同参画や喫茶店の取り組みを通して、より交流を深めることができた。他の授業や行事においても担当者同士で連携し、より良い交流方法を相談しつつ進め、充実した取り組みができた。	4.6		(1) 今年度、2学年において同学年の交流を開始し、担当者間で内容を相談しつつ進めた。来年度は今年度の取り組みをベースに、より充実した交流を目指し、武庫荘総合高校の担当者とともに連携を深め、取り組んでいく。3学年同士の交流については、総合的な探究の時間での調整ができないため、他の授業での交流を計画していく。 (2) 来年度も引き続き、出張喫茶の実施、地域のイベントへの参加を行う。今年度の『オレンジリボンフェスタ』と同様に、生徒が地域で活躍できる機会を新たに調整し、取り組みを広げていく。また、分教室単独での取り組みの他、武庫荘総合高校との共同出店を計画する等、学校と地域との継続的、組織的な連携及び協働の取り組みをさらに充実させる。	
				(1) 武庫荘総合高校との交流及び共同学習について、前年度までの取り組み内容を深め、新しい取り組みにより幅を広げることを目指し、担当者間での連携を密にし、充実した交流授業及び行事の展開に繋げることができたか。	(2) 授業や行事、地域貢献活動について、地域との連携及び協働の取り組みを充実させ、新たな取り組みや活動の場の設定、実施回数増加に繋げることができたか。			4.6
				(1) 武庫荘総合高校との交流及び共同学習について、前年度までの取り組み内容を深め、新しい取り組みにより幅を広げることを目指し、担当者間での連携を密にし、充実した交流授業及び行事の展開に繋げることができたか。	(2) 必要に応じてケース会議等を実施し、医療・福祉等の関係機関、および保護者との連携を通して、指導・支援に活かすことができた。			4.4
訪問学級	各学部の目標に準じて、様々な障害の状況や発達段階、特性に応じた指導の手立て・合理的配慮を設定し、授業の充実を図る。 重点目標 ①③⑥⑧	(1) 実態把握や学びの履歴に基づき、本人の興味・関心を広げる授業づくりを行う。 (2) 本人の思いや願いを中心に、保護者や関係機関と連携を図りながら、一人一人に応じた指導内容や指導方法を工夫する。	(1) 実態把握を的確に行い、教材を工夫しながら本人からの表出を引き出すことができたか。学習経過を踏まえ、学びを積み重ねることができたか。 (2) それぞれに応じた具体的な配慮や手立てを設定し、R-PDCAサイクルを活性化させ、指導や支援の充実を図ることができたか。	(1) それぞれの生徒に応じ、感覚を活かした教材の提示や言葉かけを行うことで、目元・口元・上肢の動きでの表出を広げることができた。また、継続したテーマや単元で取り組むことで、より表出を引き出すことができた。	4.7		(1) 児童生徒の体調や覚醒状態、教師との関係性によって本人の表出は変化する。複数の教員で関わりながら、細やかな表出の意味づけや客観性、随意・不随意の判断などを行っていく必要がある。 (2) 児童生徒の人間関係・経験の広がりを考慮し、感染対策を十分にしながら、同行訪問など多くの人と関わる機会を設定できるための校内体制の構築が望まれる。	
				(1) 実態把握を的確に行い、教材を工夫しながら本人からの表出を引き出すことができたか。学習経過を踏まえ、学びを積み重ねることができたか。	(2) それぞれに応じた具体的な配慮や手立てを設定し、R-PDCAサイクルを活性化させ、指導や支援の充実を図ることができたか。			4.7
教務部	(1) 新様式の個別の指導計画(2年目)の運用状況を把握し対応する。 (2) 統合型校務支援システムによる出欠統計や指導要録の運用状況の考察を継続する。 重点目標 ①⑥	(1)-1 R6マニュアルの改訂と適時のフォローを行う。 (1)-2 新様式の個別の指導計画の運用に必要な『3観点の評価基準』などの周知をさらに拡大していく。年度当初の着任者研修や夏季の全校研修の内容を精査する。 (2) 出欠統計入力時の欠席理由などの項目の統一を図り、随時システム改修に対応していく。検討結果を校内マニュアル内容に反映し、学部・学年への伝達を徹底する。	(1)-1 新様式(2年目)の運用にあたり、適時(実施前)の情報提供ができたか。 (1)-2 『3観点の評価基準』などの周知をさらに拡大できたか。 (2) 出欠統計や指導要録の入力の定型化を図ることができたか。	(1)-1 2年目というところでおおむねマニュアルどりの運営ができた。前年度からの変更部分についてはアナウンスが必要である。	4.5		(1) 引き続き運用状況を把握し、考察しながらスムーズに運用できるようマニュアルを見直しながら対応していく。適宜アナウンスしながら全体に周知できるようにする。 (2) 3観点の評価基準などについて教員間で深められるよう全体研修会を継続的に行っていく。個別の指導計画(教科等)を作成する時期を見て参考資料など全体に共有する。 (3) 今後も随時システム改修に対応し、校内マニュアルに反映していく。	
				(1)-1 新様式(2年目)の運用にあたり、適時(実施前)の情報提供ができたか。	(1)-2 『3観点の評価基準』などの周知をさらに拡大できたか。			4.5
				(1)-1 2年目というところでおおむねマニュアルどりの運営ができた。前年度からの変更部分についてはアナウンスが必要である。	(2) 出欠統計や指導要録の入力の定型化を図ることができたか。			4.6

令和6年度 兵庫県立阪神特別支援学校 学校評価

重点目標

I つながる連携

- I-① 一人一人の多様な教育的ニーズに応じた教育の充実
- I-② 自立と社会参加を見据えたキャリア教育及び進路指導の充実
- I-③ 訪問教育の充実
- I-④ 発達段階に応じた人権教育の推進
- I-⑤ 生徒指導(生活指導)体制の構築
- I-⑥ 教職員の専門性及び授業力の向上

II つながる連携

- II-⑦ 信頼される学校づくり・地域とともに歩む学校づくりの推進
- II-⑧ 交流及び共同学習の推進
- II-⑨ 分教室の教育内容の充実
- II-⑩ 特別支援教育のセンター的機能の充実

※評価について、A:達成している B:やや達成できた C:あまり達成できていない D:達成していない

学部 分掌	学部・分掌目標	具体的方策	評価指標	達成状況	項目 評価	評価	課題と改善方策
研究・ 自立活動部	(1)「自立活動とICT～児童生徒が主体的に取り組める活動～」のテーマを基に、学部学年研や公開授業等の授業研究を通して、教員の授業力の向上を図る。 (2)適切な実態把握に基づいた自立活動の指導を行うために、専門性向上のための情報発信や仕組みづくりを行う。 重点目標 ①⑥⑧	(1)-1 学部学年研では自主的で多様な研究を行い、児童生徒が主体的な活動を促すには、ICT機器を使用することが必要か、どのようなICT機器を使用することが効果的であるかなど、意見交換と情報共有を図る。 (1)-2 教材や支援グッズの準備や事前の打ち合わせや相談を十分に行って授業づくりを進める。 (2)-1 「自立活動チェックシート」等を活用し、児童生徒の得意なことや苦手なことを適切に捉えて、個別の指導計画を作成・活用するよう働きかける。また、教員間で相談しながら、目標や課題・指導について多角的な視点で捉えられるようにする。 (2)-2 Teamsを活用し、自立活動に関する情報を発信する。また、自主研修の推進を図る。	(1)-1・(1)-2 「自立活動とICT～児童生徒が主体的に取り組める活動～」の視点から「適切な課題か」「学習者同士、教師と学習者間コミュニケーション場面設定できたか」「将来を見据えた視点を取り入れているか」「学習効果はあるか」「適切なICTツールの選択ができてきているか」「主体的な児童生徒の取り組みはどの部分に見受けられたか」が教員間で共有できて授業づくりができたか。 (2)-1 児童生徒の全体像を捉えつつ、それぞれの実態把握や優先順位の高い課題の設定・指導ができたか。また、学部学年研などで、「自立活動チェックシート」の活用方法を周知することができたか。 (2)-2 児童生徒への指導や支援に有益な情報を発信することができたか。また、教職員は情報発信を昨年度に比べて閲覧する回数が増えたか。研修テーマは児童生徒の実態や教職員のニーズに合っていたか。	(1)-1・(1)-2の目的が達成されるよう、今年度は、外部専門家配置事業を活用し、ICTの専門家である高松先生の授業見学、講話を各学部へ実施し、実施後の研究授業等で、講話で紹介されていたアプリを使用する様子が見られた。研究テーマにおいて、ICTに関するテーマを各学年で掲げ、テーマを元に知見を深める機会を学部学年研を通じ、提供することができた。 (2)-1今年度は、学部学年研の第一回目に、全学年において、自立活動チェックシートの活用方法を動画やワークを通じて、活用方法についての周知を行うことができた。 (2)-2において、月に一度程度の頻度で、各部員からTeamsを活用して情報発信することや職員のニーズに合わせた自主研修会の運営を行うことができた。閲覧回数に関しては課題が残る。	4.6 4.5 4.5		(1)-1・(1)-2今年度同様来年度については、高松先生を講師に招聘し、ICTに関する授業の改善等を行っていただけたことが決まっている。しかし、今後どのような課題を設定し、どのような課題解決のための助言をいただくかが課題である。来年度でICTに関するテーマ設定は3年目となるため、それ以降のテーマ設定についてどのような研究テーマを設定していくかが課題である。 (2)-1今年度初めての取り組みであったが、分掌部員を含め、教員からは比較的好評だった。引き続き同様の方法でチェックシートの周知を行い、問題点が出てきた場合は改善していく必要がある。 (2)-2情報発信の分野や領域は多岐にわたり、魅力的な内容が多い。しかし、より多くの教職員に見てもらえるよう、より良い周知方法を検討し、改善する必要がある。
	災害から児童生徒の命を守るため、実践的な防災教育の推進を図る。児童生徒が安心・安全な学校生活が送れるよう、教職員対象の防災教育・不審者対応等の研修の推進を図る。 重点目標 ⑥⑦	(1) 個々の児童生徒の実態に応じた避難誘導、安全に状況判断をする訓練を行う。 (2) 警察署・消防署・専門家等による防災教育、災害時の対応等に関する研修を行う。	(1) 防災訓練時に、児童生徒と自身の安全を確保して避難経路を決定し、他の教員と協力しながら避難誘導できたか。 (2) 不審者侵入、災害等の非常時の対応、さすまたや消火器の扱い方等についての知識や技能を習得することができたか。	(1)いすれの避難訓練でも安全を確保しながら移動することができたが、避難先で児童生徒が一定期間過ごすことを想定して準備することは課題が残った。また、避難場所についても専門家の意見を聞きながら見直ししていく必要がある。 (2)不審者対応訓練では警察署の方に対応方法やさすまたの扱い方について助言を受けることができた。火災避難訓練では消防署の方に講評、助言を受けることができた。消火器の扱い方については、地震避難訓練時の動画視聴のみで実際に行うことはできなかった。	(1)4.5 (2)4.5		(1)避難後、避難場所で一定時間過ごすことを想定して準備することに課題が残ったため、次年度は避難場所で一定時間過ごすことを想定した訓練の実施を試みる。 (2)不審者対応訓練では、教職員の連携において課題があったため、次年度は不審者侵入時の連携、連絡等に重点をおいた訓練を実施する必要がある。
	(1)個別の教育支援計画新様式への円滑な移行と活用の充実を図る。 (2)地域における特別支援教育のセンター的機能の充実を図る。 重点目標 ①⑩	(1) 有効な情報収集へ向けた「本人・保護者アンケート」の改訂。 (2) 尼崎市保育管理課や尼崎市教育委員会等の関係機関との連携を図り、早期支援から発達に合わせた相談活動を実施する。	(1) 「本人・保護者アンケート」の実施が、より教育的ニーズに応じたアセスメントに貢献できたか。 (2) 就学前後の幼児・児童の適切なアセスメントを行うことができたか。保育士や教師とのコンサルテーションにより有効な支援手立てを提供できたか。	(1)「本人・保護者アンケート」が系統的な支援の実践につながるように、3年間を通して記入できる様式に改訂した。懇談の場面でより具体的に合意形成できる内容となった。 (2)地域支援としての相談支援活動は件数を増やすことができ、就学前の幼児や小学校の児童に対する実態把握や適切な支援方法を紹介できた。	(1)4.5 (2)4.6		(1)系統的な支援を主としながら、変容する実態に合わせた支援も併用した支援計画となるように、年度ごとの担任だけでなく、支援部を含む教員間の情報共有を行う。 (2)コンサルテーションの場での紹介にとどまらず、就学や進級の際に障害理解と有効な手立てが引き継がれるように支援計画等の活用を奨励していく。
進路指導部	児童生徒が自己の希望する進路について関心を高めることができるよう、適切な情報提供を行う。校内でのキャリア教育の推進を図る。 重点目標 ②⑥⑦	(1) ハローワーク、就労支援機関、保健福祉センター、福祉事業所など、関係機関と連携し、最新の情報を提供できるよう職場開拓や進路指導を行う。 (2) キャリア教育発達段階表の活用や、小・中・高で一貫したキャリア教育が行えるようにする。	(1) 児童生徒の実態や事業所に応じた、情報提供を行えたか。関係機関と連携し、適切な進路指導を行えたか。 (2) キャリア教育発達段階表を活用できたか。小・中・高で一貫したキャリア教育が行えたか。	(1)多くの関係機関を訪問して話を聞くなど、情報共有する機会を作り、懇談等や連絡帳等で保護者に情報提供を増やすことができた。教員の企業見学や福祉事業所見学の機会を設け、知識見分を広めることができた。 (2)今年度も「卒業生が進路について語る会」を設けた。企業と訓練校に勤めている卒業生やその上司の話を、在校生や保護者が聞き、現況について知ることができた。研修会では、写真を多用し、発達段階表を用いて児童生徒について話し合えた。	4.6 4.5		(1)生徒の卒業後の進路から逆算して、学校と家庭で学ぶことを考えていく必要がある。そのために、卒業後の進路に関して、より多くの方に関心を持ってもらうこと、知ってもらうことが課題である。進路説明会、教員の会社・事業所見学、事業所パンフレット等を引き続き活用し、情報提供に努める。 (2)夏の進路研修会Ⅱ(事業所見学)を希望する小中の先生方に対して、人数の制限があり、お断りしているのが現状である。そのため、小中の先生方向けに、2年に1回でも講座型の進路研修会を行い、障害基礎年金、B型や生活介護などの福祉事業所の違いと必要な力、一般企業就労や訓練校などの説明を、今後行う必要があるかもしれない。
	児童生徒の実態や障害特性に応じた指導を行うための指導体制の構築及び適切な申し合わせ事項運用の充実を図る。 重点目標 ③④⑦	(1) 児童生徒一人一人の背景や障害特性への理解促進を中心に据え、各学部及び特別支援教育コーディネーター等との密な連携を図る。 (2)各種研修等を通して職員間の理解啓発を図り、生徒一人一人に合わせた指導を行う。	(1) 各種会議などで、一人一人の背景及び障害特性等について、適切な情報共有ができてきているか。心情や精神状態を踏まえて指導が行えているかどうか。 (2)指導上の申し合わせ事項が、あくまで指導上のガイドラインであることを職員間で共通理解ができてきているか。	(1)指導においては、本人の状況や特性を踏まえ適切な指導を行うことができた。情報共有も各学年の生徒の特性等を踏まえ、指導に繋げる事ができた。 (2)指導上のガイドラインを定め、画一的な指導にならないように配慮し、職員同士で指導の内容を協議することができた。触法行為については、学校で把握したものを適切に機関と連携し指導に繋げる事ができた。	4.5 4.5		(1)生徒指導をネガティブに捉えてしまいがちだが、今後の生活における善悪の判断ができるように、伝えていく必要がある。そのために、発達段階に応じた指導や具体的な提案等を学校・家庭・福祉を含めた、本人を取り巻く環境に沿った指導を今後も引き続き行う。 (2)触法行為があった場合の外部連携と学校としての判断に難しさを感じた。担任・生徒指導・管理職を交えて協議する場を設け、ガイドラインの新たな設定等を行い、方向性を定めどのような指導が適切であるかを判断できるようにする。
保健部	「安全管理」の意識を高め、児童生徒の安心安全な活動を守るために、保健管理体制の充実を図る。 重点目標①⑦	(1)校内で起こったヒヤリハットや事故報告の事例を共有したり、緊急時を想定した緊急対応シミュレーションの実施を行ったりすることで、事故の防止や、安全に対する意識を高める。 (2)食物アレルギーや薬と飲み合わせが悪い食材がある児童生徒について周知徹底し、食に配慮のある児童生徒一覧表や調理喫食カード等を用いて安全な食育環境を整える。	(1)緊急時の対応について周知や理解を深めることができたか。事故・ヒヤリハット報告書の件数と内容に変化があったか。 (2)食物アレルギーや食について配慮が必要な児童生徒についての周知や理解を深めることができたか。	(1)1学期に各学年で緊急対応シミュレーションを実施したり、嘔吐処理の動画を見たり、職員朝礼等で熱中症警戒アラートについて周知をしたりし、安全管理の意識を高めた。その結果、4月のヒヤリハットを含む事故報告は5件あったが、5月以降の発生件数は減少し、熱中症による事故は0件であった。 (2)食に関する配慮が必要な児童生徒の一覧表を学部ごとに分けて提示し、各学年で確認や、周知度の意識調査を定期的に行った。職員研修ではアレルギーについての理解を深めることができた。	4.6 4.6		(1)安全管理に対する意識が高まってきたが、未然に防げる事故が起こっている。熱中症や事故を未然に防ぐために、今年度と同様に動画の視聴や研修、注意喚起を定期的に行っていく。事故発生時の対応の周知を図るために、今年度と同様に1学期に緊急対応シミュレーションや動画での研修を行う。 (2)後期の意識調査では全体的に周知度が低かったため、年度初めだけでなく、毎学期初めや校外学習の前には該当児童生徒についての確認を学年で必ず行い、アレルギーについての研修も行っていく。
	授業や校務でノートPC、iPad、AppleTV、電子黒板などのICT機器を安心・安全かつ効果的に活用できるよう教職員の情報セキュリティ意識の向上やICT機器の整備や機器活用能力の向上を図る。 重点目標①⑥	(1) iPadを中心としたICT機器等の基本的な操作やICTを効果的に教員に活用する方法の習得を図るため、計画的に校内研修を実施する。 (2)職員会議などで、情報セキュリティに関するミニ研修会を行い、教職員の情報セキュリティ意識の向上を図る。 (3)校務や授業等で安心・安全に活用できるように適切に児童生徒・教師のiPadや電子黒板などのICT機器を適切に管理する。	(1) 計画的に研修会を企画・実施することで、教員のICT機器活用指導力の向上を図ることができたか。 (2)情報セキュリティを守り、日常的な業務が行えるように職員会議後のミニ研修会を計画的に行うことができたか。 (3)教師児童生徒用iPadの管理簿を作成し、適切に管理できたか。児童生徒用iPadはMDMで登録し、情報セキュリティをしっかりと守り適切に管理できたか。	(1)計画的に校務における生成AI活用についての校内研修やICT機器の利活用についてのミニ研修会などで、教員のICT機器活用指導力の向上を図ることができた。 (2)最新の情報セキュリティ情報を盛り込んだ情報セキュリティに関するミニ研修会を計画的に行うことができた。 (3)教師児童生徒用iPadの管理簿を元に新しいiPadの導入や返却など管理を適切に行うことができた。児童生徒用iPadをMDMで管理し、情報セキュリティをしっかりと守り適切に管理することもできた。	4.7 4.7 4.6		(1)これからのAIを様々な場面でAIの活用がされていく。今年度の研修では対話型のAIについて研修を行ったが、幅広い知識をえられるよう、研修の内容を精選していく。 (2)ICTを活用する上で、情報資産が外部に漏れるようなことは絶対にあってはならない。今後も継続して情報セキュリティの研修をし、意識の向上を図る。 (3)全体の端末数は増え、保管に留まる端末が増えている。保管庫から出す際に必ず担当者が把握することを徹底しながら、今後も管理を適切に行っていく。